

市場像の源流——交換を巡る考察の系譜*

沖 公祐†

はじめに

1989-91年のソ連・東欧における社会主義体制崩壊以降、計画経済による市場経済の置換という軛から自由になったかの如く、残存する社会主義諸国においても、資本主義諸国内部においても、多様なオルタナティブが湧出してきた。それらに共通しているのは、積極的にせよ、消極的にせよ、市場機構を前提としたうえで、自らが理想とする社会を構想しようとする点にある。逆に言えば、代替案は各々の市場像の陰画をなしているのであり、その意味で、市場をどのように理解するかが改めて問われてきていると言ってよい。

マルクス派においても、これまで、市場像が再検討されるなかで、貨幣や資本をどう把握するか、市場を通じた需給調整メカニズムをいかに説明するか、効率性やイノベーションにおいて市場が果たす役割を重視すべきか否か、といった様々な議論がなされてきた。しかしながら、市場像の根源に関わる問いが発せられることはなかったように思われる。すなわち、市場において交換されるのは何かという問いがそれである。

市場とは交換の場であるが、それでは、何が市場では交換されるのか。その答えはあまりに自明であり、あえて問い質す必要などないように見える。しかしながら、資本主義の生成期にあって、市場がその外部と激しい軋轢を生んでいた17・8世紀には、市場で交換されるのは何かという問題が盛んに議論されたのである。本稿は、今日では忘れ去られたこの問いを巡る考察を通じて、市場像の言わば源流に遡行し、マルクス経済学における市場把握を洗いなおそうとするものである。

1 奢侈に牽引される市場——ロックとヒューム

1.1 欲求と交換

交換を引き起こす原動力は何か。この問いに対し、経済学は、人間の欲求であると答えてきた。人間の欲求こそが交換の基盤である。このような理解は、現代経済学の祖とされるアダム・スミスの次の言葉のなかにも見て取ることができる。

他人にある種の取引を申し出るものはだれでも右のように提案するのである。私の欲しい want ものをください、そうすればあなたの望む want これをあげましょう、というのが、すべてのこういう申し出の意味なのであり、こういうふうにしてわれわれは、自分たちの必要としている他人の行為の大部分をたがいに受け取りあうのである。(Smith (1776) p.26, 訳 I-26 頁)

* 『香川大学経済論叢』第79巻第4号，2007年3月，151-185頁。

† 香川大学経済学部 kosuke@ec.kagawa-u.ac.jp

私の「欲しい want」ものと他人の「望む want」ものが交換される。この構図が市場の原風景であるということは、今日の経済学——マルクス派も例外ではない——では、改めて論ずるまでもない、自明なことと考えられている。個人の欲求から出発し、その充足を求めて交換が拡大していくところに成立したものが市場である。こうした市場像は、利得の最大化を追求するという近代的人間観に慣れ親しんだ目からは、疑う余地すらないもののように見える。

しかしながら、このような市場の見方は、スミスの生きた時代には決して当たり前のもではなかった。スミスの同時代人や彼に先行する思想家たちにとっては、欲求が交換を惹起するということは自明ではなく、むしろ人間の欲求は交換とは容易に結びつかないと考えられていた。例えば、ロックは次のように述べている。

たとえば、ここに一つの島があって、これが世界の他の部分との一切の交易から隔絶されていると仮定しよう。そこにはわずかに百家族しか住んでいないのに、羊、馬、牛、その他の有用な動物と、栄養のある果物と、十万倍の数の人々を養う穀物を産するに足る十分な土地とがある。しかしその島には、それがありふれているという理由からか、あるいは腐敗しやすいという理由からか、貨幣の代わりをするのに適したものが皆無だとしよう。とすれば、こんなところで、自分自身の勤労が生み出したものにせよ、あるいは他人の同じように腐敗しやすく有用な日用品と交換できるものにせよ、自分の家族が使用する以上に、そしてその消費を十分に満たす以上に、所有物を拡大する理由がだれにありえようか。(Locke (1689) p.319, 訳 222-223 頁)

ロックによれば、貨幣のない世界では、人間の欲求は狭い限界のうちに閉ざされたままであり、それゆえ、欲求に基づいた交換は広範なものとはなりえない。これは現代の経済学者が素朴なかたちで抱いている市場の発生史観、すなわち、人間が欲求を満たすために交換を拡大していくなかで、貨幣を備えた市場が発生してきたという見方とは明らかに異なる。ロックの立場からすれば、欲求を市場の出発点に置くことはまったく適当ではない。なぜなら、人間本来の欲求はその乏しさゆえに、交換の発展をむしろ阻害することになるからである。同様の理解は、ヒュームの著作のなかにも発見することができる。

どんな国家の場合でも、最初のまだ未開な時代にあつて嗜好的な欲望が自然的な欲望と混同されるにいたらなかったときには、人びとは、自分の畑の生産物とか、かれらが自らそこまで加工できる粗雑な改良物とかで満足しており、交換の機会を、少なくとも、同意によって交換の共通の尺度となった貨幣との交換の機会を、ほとんどもたない。(Hume (1752) p.319, 訳 42 頁)

このようにヒュームも、未開の時代においては、ひとびとは与えられた生活に満足しているため、さらなる欲求の充足を求めて交換を拡大していく誘因は存在しえないと考えている。さらに、ヒュームは、交換を求める誘因の欠如が「熟練 skill と勤労 industry を増大しようとする誘因」(Hume (1752) p.285, 訳 10 頁) の欠如をもたらすと指摘しているが、ステュアートは、この点について、より明確に、欲求が勤労 industry を制限すると述べた。

貨幣も、またそれに相当する物もない国では、人類の欲望はわずかな対象、すなわち飢え、乾き、寒さ、暑さ、危険などの不安を取り除くことに限定されるものと思われる。自分の勤労によって質素な生活を楽しめる物をすべて獲得できる自由人は、休息を享受して、それ以上は働かないだろう。こうして一般に、いまいった目的に対応する需要が充たされればたちまち、仕事の増加はいっさい止むだろう。(Steuart (1752) I, p.237, 訳第 1・2 編 165-166 頁)

奴隷とは異なり、他人に労働を強制されることのない「自由人」は、限られた欲求が満たされるならば、それ以上は働こうとしないだろうとステュアートは推論する。ステュアートの議論では、勤労が交易を促進するのだから、欲求が限定されているならば、「勤労はおのずと停止し、またその結果として物々交換も止んでしまう」(Steuart (1752) I, p.237, 訳第1・2編 166頁) ことになる。このような状態をステュアートは、増殖の「社会的不能」(Steuart (1752) I, p.39, 訳第1・2編 28頁) と呼んだのである。

このように、ロック、ヒューム、ステュアートのような他の点では少なからず立場を異にする論者が、欲求と交換の関係については、共通した見解をもっている。すなわち、彼らによれば、人間の本来の欲求は、その狭隘さゆえに市場の発展を妨げることになる。何らかのかたちでこの障碍が解除されない限り、交換は決して広範なものとはなりえない。このような理解は、欲求から交換が直接に引き起こされるといふ今日の支配的な見方とは対照的である。

人間の欲求は交換を促進するのか、あるいはそれを阻害するのか。欲求が交換に及ぼす効果に対する相反する二つの見方は、欲求についての異なった理解から生じている。現代の経済学においては、人間の欲求はほとんど無限の広がり大きさをもつと想定されている。この想定のもとでは、欲求を充足するための手段は、欲求に対しつねに稀少となる。これに対し、ロックらの考えによれば、人間の欲求は限られているため、一定の限度に到達すれば、欲求は充足されて止むことになる。欲求を満たす手段は、その量に応じて、稀少なこともあれば過剰なこともあるだろうが、欲求の限度を越えてなお過剰を拡大しようという誘因は、人間の自然な欲求だけからは生まれてこない。

このような欲求の捉え方の違いに対応して、欲求が交換に対して与える正反対の影響が引き出される。すなわち、前者においては、欲求の無限性ゆえに交換は際限なく拡大していくが、後者によれば、欲求には限りがあり、このため、交換が行なわれるにしてもその広がりには有限の欲求によって制限されることになる¹。

1.2 奢侈と欲望

市場の発展とともに人間の欲求が飛躍的に拡大していったその後の歴史を知る者にとっては、人間の欲求を有限なものとするロックらの立場は、欲求のもつ柔軟性を過小評価しているように見える。しかしながら、彼らは、ただたんに欲求を有限なものとして捉えていたわけではない。彼らが欲求の有限性を強調したのは、それとは異なった質の欲求を際立たせるためであった。おそらくは、資本主義の生成期にあって、そうした異質の欲求が台頭してくるのを目の当たりにした彼らは、これをいかに位置づけるかに苦慮したのであった²。有限な欲求とは区別されるこの種の欲求についての議論は、奢侈 luxury という語を巡って展開された。

17・8世紀の思想家たちにとって、奢侈はもっとも重要な問題のひとつであった。特に、マンデヴィルの『蜂の寓話』の発表以後、奢侈を巡る議論は、イングランドのみならず、スコットランドとフランスをも巻き込んだ論争へと発展していく³。当時の奢侈的消費の異常な加熱ぶりに対し、

¹ ボランニーは、アリストテレスについて「人間はほかの動物同様、本来自給自足的なものである、というのがアリストテレスの描く像であった。したがって、人間の経済は人間の欲求 wants や必要 needs の無限性——今日の用語でいえば、稀少性の事実——から派生するものではなかったのである」(Polanyi et al. (1957) p.66, 訳 188頁) と述べている。また、クセノスも、アリストテレスを含めた古代ギリシア人にとって「必要 necessity と欲求 needs は、自然と正義が定めた限界の中におさまるものであった」(Xenos (1989) p.3, 訳 5頁) として、同様の見方を示している。こうした解釈が正しいとすると、欲求を有限なものとする見方は、17・8世紀の思想家たちに固有なものというよりも、むしろ、アリストテレス以来の西欧の伝統的な欲求観なのかもしれない。

² この新たな欲求——後述する奢侈に対する欲望——の勃興とそれに伴う社会変化については Sombart (1912) Kap.4 を参照。

³ 17・8世紀における奢侈を巡る論争については、森村 (1993) 第3部第1章、Berry (1994) chap.6 を参照。

ある者は墮落であるとして批判し（ルソー）、ある者は技芸の洗練であるとして賞賛し（ヒューム）、また、ある者は悪徳ではあるが社会全体にとっては有益であるとして擁護した（マンデヴィル）。

ところで、英語の奢侈 luxury（フランス語では luxe）という言葉は、ラテン語の luxus に由来し、それはもともと豊富や過剰という意味をもっていた。この原義から言えば、奢侈とはある限度を越える過剰性を含意している。問題は奢侈が何に対しての過剰であるのだが、その評価の相違にもかかわらず、奢侈とは欲求に対する過剰であるというのが当時の一致した見解であった。このような奢侈の捉え方は一見すると矛盾したものに見える。なぜなら、奢侈が欲求を超えるものだとするならば、それは定義上欲求の対象ではないはずだが、奢侈論争の引き金となったのは、まさに奢侈が尽きせぬ欲求の対象として立ち現われてきたという事実であったからだ。

欲求を超える余剰という奢侈のこの定義は、当時の思想家たちが共有していた欲求観を踏まえなければ理解することは難しい。すでに見たように、彼らは、欲求を有限なものと捉えていたのだが、その欲求の範囲は、現代の欲求観からすれば著しく狭いものである。彼らにとって、欲求 want とは、必要 necessary に対する欲求 need のことにほかならなかった。今日の一般的な理解では、必需も奢侈もともに欲求の対象であり、したがって、両者の区別は相対的で、截然とは区別できない。このような見地から、あえて奢侈を規定するとすれば、商品の使途や消費のあり方によって区別するか、何らかの価値判断に訴えるかしかない。しかし、17・8世紀の思想家たちにとっては、線引きの困難はあるにせよ、両者が異なることは明らかであった⁴。というのも、彼らは、奢侈に対する欲求を必要に対する欲求とは異質の情念として捉えていたからだ。例えば、ロックは、奢侈に対する欲求を言い表わす際に、必要に対する「欲求 want」とは別の「欲望 desire」⁵という語をあてている。また、ルソーは、「自尊心（虚栄心）amour-propre」を自己保存の欲求としての「自己愛（自愛心）amour de soi-même」からは明確に区別すべきだと主張している⁶。こうした点から、17・8世紀の思想家たちの多くが、必要に対する欲求 want/need と奢侈に結びつく欲望 desire とを異なった情念として理解していたことが窺える。この理解を前提にすれば、欲求を超える余剰という奢侈の定義は必ずしも形容矛盾とは言えない。奢侈は、欲求 want/need にとっては確かに過剰であるが、欲望 desire に対してはその対象となりうるのである。

このような欲求と欲望の区別を踏まえただけで、奢侈を巡る17・8世紀の議論を振り返ってみると、当時の思想家たちの多くが、欲求ではなく欲望こそが交換の起動力をなすと理解していることに気づかされる。肯定的に捉えるか、否定的に捉えるか、という評価の違いはあるにせよ、奢侈に対する欲望が市場の興隆と結びついているということは、当時における議論の前提ですらあった。こうした理解は、資本主義の初期に特徴的な、奢侈的消費の爆発的拡大という歴史的事実の反映にすぎないように見える。しかしながら、たんなる現実の模写に思えるこの見方の背後には、独特の論理が伏在しているのである。交換に関するロックとヒュームの所説を通じて、この点を明らかにしてみよう。

先の引用にあるように、ロックは、貨幣のない世界を議論の出発点に置く。このような世界では、欲求を超える余剰は存在しないとされるのだが、それは余剰を生産しうる能力が欠けているためではない。貨幣のない世界では、そもそも余剰を生産する誘因がないのである。なぜなら、自分の消費能力を超える余剰を生産したとしても、ここでは腐敗するにまかせるほかはなく、結局は無

⁴マンデヴィルは、次のように述べて奢侈についての相対的な見方を示しているが、それが当時の常識に対する挑戦であったことに注意すべきである。「人間を生き物として存続させるのに直接必要 immediately necessary でないものはすべて奢侈 Luxury であるとするれば（厳密にはそうであるべきだ）、世の中には、裸の未開人にとってさえ、奢侈のほかにはなにも見出すことができない」（Mandeville (1714) p.107, 訳 101 頁）

⁵Locke (1689) p.312, 訳 215 頁。この邦訳では want は「必要」と訳されており、奢侈に対する「欲望 desire」との区別がより明確にされているが、他方で、両者の対比は見えにくくなっている。当時のすべての論者が、ロックのように二つの情念を欲求 want と欲望 desire という用語で区別していたわけではないが、概念上の区別は概ねなされていた。

⁶Rousseau (1754) pp.182-183, 訳 167-168 頁。ルソーの自尊心と自愛心については、内田 (1971) 125-126 頁を参照。

駄になってしまうからだ⁷。

貨幣のない世界とは、「人間の生活にとって真に有用なもの」(Locke (1689) p.317, 訳 221 頁) 必要に対する欲求だけの世界であるが、ロックによれば、そこでは交換は行なわれない。交換は、「人間の愛好とか合意によって価値を与えられているもの」(Locke (1689) p.318, 訳 221 頁) すなわち、奢侈的なものに対する欲望のもとではじめて発生する。金・銀やダイヤモンドのような耐久性のある奢侈を交換によって取得するために、自分の必要を超えて余剰を生産しようという衝動が生じてくるのである。人間の欲求によって限界づけられ、腐敗によって制約される必要だけの世界とは異なり、奢侈のある世界では、欲求の制限と腐敗の制約から解放されて交換が無際限に拡大していくことができる⁸。

「奢侈について Of luxury」⁹ という論考を表わしたこともあるヒュームは、ロックにもまして、奢侈が交換に及ぼす影響を強調した。ロックと同様、ヒュームも、必要に対する欲求だけの世界では、交換は発展しないと考える。しかし、ロックが、貨幣の発生と奢侈に対する欲望の形成を同視していたのに対し、貨幣は交換を円滑にするための「油」(Hume (1752) p.309, 訳 33 頁) にすぎないという立場から、ヒュームは交換の拡大は奢侈に対する欲望に懸かっていると明確に主張した。

人びとがこうしたすべての享楽に洗練を加えはじめ、必ずしも故郷で生活せず、近隣で生産できる物に満足しなくなったのちには、あらゆる種類の交換と商業とが増大し、ヨリ多くの貨幣がその交換に入りこんでくる。(Hume (1752) pp.319-320, 訳 43 頁)

洗練された奢侈の登場によって、ひとびとの欲望は掻き立てられ、貨幣を介した交換が頻繁に行なわれるようになる。このように、ヒュームは、奢侈に対する欲望が交換に及ぼす影響を指摘したが、そこからさらに踏み込んで、奢侈と生産との関係にも言及している。すなわち、技芸の洗練によって、奢侈に対する欲望が刺激されると、奢侈を獲得するために「熟練 skill と勤労 industry」(Hume (1752) p.285, 訳 10 頁) は高められ、より多くの「余剰 superfluity」(Hume (1752) p.285, 訳 10 頁) が生産されるようになる。もっとも、奢侈のない世界では、「熟練 skill と勤労 industry」を高めていくことが潜在的に可能であっても、「余剰」は生産されないと述べていることから分かるように、交換の原動力は、あくまでも生産水準ではなく、奢侈に対する欲望の側に存するとヒュームは見ている¹⁰。

ロックとヒュームの相違は小さくはないが、両者の主張の共通項を括り出すとすれば、次の二点にまとめられる。

第一に、ロックとヒュームは、人間に内在する欲求から市場を導出しようとはしない。欲求に基づく交換は、たとえそれがなされるとしてもすぐに壁に突き当たってしまうと彼らは考えたからである。欲求の限度を超えてなお交換が拡大していくためには、奢侈に対する欲望が介在する必要がある。ここで、重要なのは次の点である。すなわち、必要に対する欲求とは異なって、奢侈に対す

⁷ロックは、所有権に対し有名な但し書き——「少なくとも(自然の恵みが)共有物として他人にも十分に、そして同じようにたっぴりと残されている場合には」(Locke (1689) p.306, 訳 209 頁)——を付帯したが、その他に所有権を制限するものとして腐敗による制約を挙げている。「ものがそこなわれないうちに生活の何かの便宜のために人が利用できるかぎり、だれでも自分の労働によって所有権を定めてよいのである。これを超過するものはすべて彼の分け前以上のものであり、他人のものなのである」(Locke (1689) p.308, 訳 211 頁)。

⁸ロックは、奢侈品における腐敗の制約の解除を次のように指摘している。「彼はこういう【貴金属やダイヤモンドのような】耐久性のある品物を好きにだけたくさん蓄積してもよかったのである。なぜなら、彼の正当な所有権の限界をこえるのは、彼の所有物が大きいときではなく、彼の手において何かが無駄に腐ってしまうときだからである」(Locke (1689) p.318, 訳 222 頁, 括弧内引用者)。

⁹Hume (1752) の初版(H版)から1758年版(M版)まで「奢侈について Of luxury」と題されていた論考は、その後、「技術における洗練について Of refinement in the arts」と改題された。訳書 20 頁訳注(1)参照。

¹⁰「もし、かれらの熟練と勤労が増大すれば、かれらを維持するに足る以上の多くの余剰 superfluity がかれらの労働から生ずるに違いない。この結果、かれらには熟練と勤労とを〔さらに〕増大しようとする誘因がなくなる。なぜなら、かれらは右の剰生産物を、自分たちの快樂ないし虚飾に役立つ財貨と交換することが全くできないからである」(Hume (1752) p.285, 訳 10-11 頁, 括弧内訳者, 訳は変えてある)

る欲望には限界がないということ、そして、この奢侈に対する欲望の無限性は、交換に衝き動かされたものであるということである。ロックとヒュームのこの主張は、奢侈に対する欲望によって交換が引き起こされるという意味で、奢侈交換論と呼ぶことができる。

第二に、ロックとヒュームの議論では、余剰を生産する能力の大きさは、交換の拡大における積極的な役割を担っていない。彼らによれば、必要だけの世界では、余剰が潜在的に存在したとしても、奢侈に対する欲望の不在ゆえに、そうした余剰は現実には生産されえない。生産力ではなく、奢侈に対する欲望が交換の発達を牽引するというのが、ロックとヒュームの市場に対する基本的な見方なのである。

2 奢侈から必要へ——スミス

2.1 市場像の転換

スミスは、ロックのような先行者や、ヒューム、ステュアートのような他の同時代人とは異なって、奢侈に対する欲望が交換の拡大において果たす役割を強調しなかった。むしろ、奢侈を巡って激しい議論が戦わされてきたことをスミスが知らなかったはずはない。じっさい、スミスが『道徳感情論』で論じた主題は、必要に対する欲求に還元されえない欲望（ルソーのいう「自尊心（虚栄心）amour-propre」）の次元に関わるものであった¹¹。しかし、『国富論』で欲求 want を交換の起点に据えるとき、あるいは、諸国民の富が奢侈品を除いた「生活の必需品 necessities と便益品 conveniences のすべて」（Smith (1776) p.10, 訳 I-1 頁）から成ると述べるとき、スミスは、奢侈に対する欲望の問題を捨象しているように思われる¹²。

とはいえ、奢侈に対する欲望を捨象したことは、必要と奢侈の区別を相対的なものとし、欲求を無際限なものに見なす近代的な欲求観に『国富論』のスミスが染まっていたことを意味するわけではない。次のような交換の描写からは、必要に対する欲求の有限性という古典的観念をスミスが共有しているのを読み取ることができる。

分業がひとたび完全に確立すると、人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるのは、彼の欲求 wants のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。かれは、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を上回る余剰部分 surplus part を、他人の労働生産物のうち自分が必要 occasion とする部分と交換することによって、自分の欲求の大部分を満たす。（Smith (1776) p.37, 訳 I-39 頁, 訳は変えてある）

分業が完全に確立した社会では、人は必要に対する「欲求 want」を自分の労働生産物だけでは満たすことができない。そこでは必要の欠如は、交換によって充足される。分業によって生じた必要の欠如を交換を通じて充足するというこの説明は、「欲求 want」の有限性をスミスが前提していることを暗に示している。こうしてみると、1.1 の冒頭にあげたスミスの文章に人間の無際限な欲求が交換が市場の基礎にあるという主張を読み込むのは適当でないことが分かる。このような解釈は、現代の欲求観をスミスに投影したものにすぎない。スミスは、欲求の有限性をあくまで前提と

¹¹特に、Smith (1754) I, iii, 2 参照。また、『道徳感情論』では、奢侈の及ぼす影響についてのヒュームによく似た議論——ストア主義的色彩を帯びてはいるが——も展開されている（Smith (1754) IV, 1）。ルソーがスミスの『道徳感情論』に与えた影響については、内田 (1971) 104-163 頁に詳しい。

¹²スミスは、奢侈品 luxury を富から除外したが、他方では、「必需品 necessities」に加えて、「便益品 conveniences」を国富のなかに含めた。このことは、スミスが必要と奢侈の単純な二分法をとってはいないことを示唆している。すぐ後で述べるように、スミスは、奢侈ではなく必要に基づく交換論を展開したのだが、その場合の必要の範囲は、時代や場所によって変わりうる弾力的なものである。スミスにとって、必要とは、文字通りの意味での生活必需品 subsistence ではなく、「便益品 conveniences」を含めたより広い概念であった。

したうえで、奢侈に対する欲望を重視するロックやヒュームとは対照的に、必要に対する欲求を交換の基底に据えたのである。スミスのこの立場は、ロック・ヒュームの奢侈交換論に対して、必要交換論と呼ぶことができよう。

前述したように、ロック・ヒュームの奢侈交換論においては、いかにして交換が欲求の有限性に制約されることなく拡大していくことができるか、というのが問題の焦点であった。換言すれば、それは、必要が充足されたうえで、なお交換が行なわれるのはいかにしてか、という問いであった。反対に、スミスの場合には、必要の充足ではなく必要の欠如が交換の出発点になっている。しかし、他方で、スミスは伝統的な欲求観、すなわち、必要に対する有限な欲求という見方を保持している。このため、スミスの交換論においては、交換の進展が諸個人がどの程度必要を欠いているかに規定されることになってしまう。

諸個人が必要を欠いているか否かは、交換にとっては外的な事柄であるはずだが、スミスは、次のような手続きを踏んでこれを内生化する。まず、独立した諸個人、必要のすべてを自分で満たすことのできる諸個人を起点に置く。人間には交換しようとする性向があるとされるが、それだけでは、交換が行なわれることにはならない。個々人の労働生産力の差異が交換性向を現実のものにする。すなわち、生産性の高い労働に特化して、互いの必要を交換し合った方が自分の利益にかなうと知ると、諸個人は特定の仕事に専念し、社会的分業が行なわれるようになる。このような分業によって必要の欠如が生じると同時に、必要の欠如を埋めるために交換が行なわれる。他方で、分業がなされるのも交換を期待してのことである。ここでは、分業がなければ交換は行なわれなし、交換がなければ分業は存在しないというかたちで、分業と交換は相互に前提しあう関係にある¹³。

分業の効果はそれだけではない。分業は「特定の業務に対してもっている才能や天分」(Smith (1776) p.28, 訳 I-28 頁)の相違に基づくが、スミスによれば、「天分の差異は、多くの場合、分業の原因だというよりもむしろその結果なのである」(Smith (1776) p.28, 訳 I-28 頁)から、分業自体が天分の差異をつくりだす効果をもつ。結果として、分業は、必要の欠如と生むと同時に、労働者の技能を高めて、生産力を上昇させ、初発の自足した状態を超える余剰をつくりだすことになる。

生産力が上昇する要因があったとしても必要だけの世界では、市場の発達は見えないというのがロックやヒュームの一貫した見解であった。必要だけの世界では、生産力の上昇がかりに可能であったとしても、余剰の生産には結びつかず、せいぜい労働時間の短縮に役立つにすぎない。生産力は、市場の拡大の必要条件ではあっても、十分条件ではないとロックやヒュームが考えたのは、このような理由からであった。必要だけの世界では、その需要の狭隘さによって、いずれ市場の発展が妨げられることにならざるをえない¹⁴。

しかし、スミスにしてみれば、これはあまりに静態的な見方ということになる。長期的動態を考慮すれば、必要交換論に基づいても市場の発達や国富の増大を説くことは十分可能である。スミスは、このことの根拠を生産力の上昇による余剰の増大が資本蓄積を通じて人口の増加を促す点に求めた。スミスによれば、一国の人口は、国富、すなわち、その国の土地と労働の年々の生産物の大きさによって限界を画されている¹⁵。逆に言えば、生産力の上昇に伴う余剰の拡大は、より多くの人口を維持することを可能にする。余剰が資本の蓄積に回されるならば、その分、生産的労働者の賃金は増加することになる。スミスは、マルサスを先取りするかのような人口論に基づいて、賃金の増加が「結婚と増殖」(Smith (1776) p.97, 訳 I-136 頁)を刺激して人口を増大させると考え

¹³Smith (1776) pp.27-28, 訳 I-27-28 頁。

¹⁴ヒュームは、必要だけの世界では、「おのずから安逸の風習が広まるに至る」(Hume (1752) p.285, 訳 11 頁)と述べている。

¹⁵「生産的労働者も不生産的労働者も、またぜんぜん労働しない人たちも、すべてその国の土地と労働の年々の生産物によってひとしく維持されている。この生産物は、たとえどんなに大きくても、けっして無限ではありえず、かならず一定の限界をもっている」(Smith (1776) p.332, 訳 I-519 頁)

た。ロックやヒュームの言うように個々の欲求に限度があるのは確かだとしても、人口そのものが増えるならば、社会全体の欲求（有効需要）は拡大しうる¹⁶。そして、資本蓄積による生産的労働者の増加は、さらなる余剰を生み出す。スミスは、分業の拡大 生産力の上昇 余剰の増大 資本の蓄積 人口の増加 分業の拡大というスパイラルな成長論を唱えることで、必要交換論の枠内でも需要問題は解決されうると主張したのである¹⁷¹⁸。

こうしてみると、スミスの交換論では、分業がきわめて重要な意味を担わされていることが分かる。すなわち、分業が必要の欠如を作り出すという点で、交換の前提をなすと同時に、分業が人口を増加させ、社会全体の欲求を拡大するという点で、交換の推進力をなしているのである。スミスは、分業による必要の欠如が交換を引き起こすということによって、たんに交換の対象を奢侈から必要へと移しただけではない。スミスは、分業に基づく生産力の増進が交換を発展させると考えた。むしろ、ロックやヒュームにあっても、生産力は供給要因として捉えられてはいたが、需要要因である奢侈に対する欲望が起動されたときにそれははじめて意味をもつものであった。これに対し、スミスは、分業が二重の意味で欲求を作り出す——個人にとっては、必要の欠如を作り出し、社会全体にとっては、欲求の総和を拡大する——と見ることによって、生産を供給要因としてだけでなく、需要要因としても捉えたのである。

いまひとつ、奢侈交換論から必要交換論への変移の背後に、重大な転回が潜んでいることを見逃すことはできない。すなわち、スミスは、交換論の焦点を地主のような富裕者から労働者へとずらしたのである。奢侈交換論の場合、交換の担い手は、余剰を生産しうる富者であり、労働者は、せいぜい富裕者の求める奢侈の生産者として考慮されるにすぎなかった。スミスは、労働者、特に、スミスの言う意味での富の生産者であり消費者でもある生産的労働者を重視した。奢侈に対する欲望ではなく、必要に対する欲求をスミスが交換の起点に据えたことの原因には、このような富裕者から大衆への視点の移行があったのである¹⁹²⁰。

¹⁶ スミスは必ずしも個々の必要に対する欲求が固定的なものだと考えていたわけではない。次のように述べるスミスは、欲求が一定の弾力性をもつことを認めている。「私が必需品 necessities という場合、それは、生活を維持するために必要不可欠の財貨だけではなく、その国の習慣からして、たとえ最下層の人々でも、それがなければまともな人間としては見苦しいようなものすべてをふくむ」(Smith (1776) pp.869-870, 訳 III-298 頁)。注 12 も参照のこと。

¹⁷ このような考えは、スミスの資本蓄積論（『国富論』第 2 編第 3 章）に示されているが、ここで、その内容を概観しておこう。スミスによれば、「資本の蓄積と土地の占有」(Smith (1776) p.65, 訳 I-80 頁)のある社会では、土地と労働の生産物は、賃金と利潤と地代とに分かれる。説明の簡単化のために、いま地代を措くとすると、生産力の上昇による生産物の増加は、利潤を増加させる。ところが、資本の所有者の利潤追求が専ら必要に対する欲求によって駆動されているとすると、必要が満たされれば、さらなる利潤を得ようとする積極的な理由はなくなる。こうした理由から、奢侈交換論に立つステュアートは、勤労の繁栄のためには、フリー・ハンズの労働や奉仕を雇い入れる「洗練や奢侈に対する富者の好み」(Steuart (1752) I, p.44, 訳第 1・2 編 31 頁)——本稿の言い方では、奢侈に対する欲望——が不可欠だと説いた。これに対し、スミスは、奢侈の消費は不生産的労働の雇用を意味するのであって、富の増進には寄与しないと主張する。利潤が不生産的労働ではなく、生産的労働に向けられる場合に、資本は増加し、その結果として、国の富が増大する。言い換えれば、資本の所有者が、奢侈に対する欲望に囚われて「浪費 prodigality」に耽ることなく「節約 parsimony」(Smith (1776) p.337, 訳 I-528 頁)し、生産的労働者を雇用する資本（賃金部分）を利潤から追加することによって国富は増大するのである。

¹⁸ スミスには、余剰の捌け口理論と呼ばれる独特の外国貿易論があり、このことから、国内市場を必要交換論として、外国貿易を奢侈交換論として、理論化したと見る向きもあるかもしれない。しかし、スミスは、「外国貿易は、自国の余剰物資を輸出して他国の物資と交換し、それによって自国民の欲求 want の一部を満たし享楽を増大させる」(Smith (1776) p.446, 訳 II-106 頁)と言っており、外国貿易も基本的に必要交換論によって理解している。なお、スミスの余剰の捌け口理論については、森田 (1997) 46-48 頁参照。

¹⁹ ハーシュマンは、『国富論』ではルソーの「自尊心（虚栄心）amour-propre」の問題が捨象されるようになった理由を「アダム・スミスが彼以前の論者よりはるかに『人類の大部分を占める民衆 great mob of mankind』、すなわち平均的な人間の行動に関心があった」(Hirschman (1977) p.111, 訳 112 頁)ためだと説明している。

²⁰ この視点の移行は、1760 年代の穀物取引論争、すなわち、生存に必要な穀物を自由な市場の取引に委ねてよいか否か、という論争とも密接に関連しているように思われる。ホントとイグナチエフによれば、スミス以前には「当時のヨーロッパにおける周期的な食糧不足やさらには飢饉、不完全雇用の遍在を前提とすれば、経済学者を自負する人々までもが、労働貧民の生活資料は、飢饉に備えて十分な備えを確保し、穀価高騰の年でも生活資料の価格を規制するための、為政者や中央当局による穀物市場の『統制』によってのみ守られうると考えたのは当然であった」(Hont and Ignatieff (1983) p.13, 訳 16 頁)という。必要の領域を完全に市場に委ねてしまうことには、大きな抵抗があったのである。これに対し、スミスは、「もし労働市場と食糧品市場がうるさい干渉から自由になれば、労働の価格と食糧品の価格は長期的には労働貧民が決して飢えないですむように均衡するであろう」(Hont and Ignatieff (1983) p.14, 訳 16-17 頁)と考えた。このスミスの考えは、当時の常識とは程遠く、きわめてスキャンダラスなものであったという。

2.2 マルクスのスミス批判

マルクスは、このようなスミスの主張に対すして批判的であった。スミスの必要交換論についての直接的な言及は『資本論』にはほとんど見られないが、例えば、『経済学批判要綱』(以下、『要綱』)では、次のように述べている。

アダム・スミスのばあいには、この矛盾〔特殊な対象としての労働時間と一般的対象としての労働時間の矛盾〕がまだ相互並置として現われている。労働者はまだ、特殊な労働生産物(特殊な対象としての労働時間)とならんで、そのほかにさらに、一般的商品のある分量(一般的対象としての労働時間)をつくらなければならない。交換価値の二つの規定が、彼にとっては外的に相互にならんで現われている。全商品の内奥までが矛盾によってとらえられ、また矛盾によって浸透されたものとして現われるまでには、まだいたっていないのである。このことは、スミスが生きた時代の生産の段階に照応しており、この段階では労働者は、まだ彼の生計の一部分を直接彼の生産物で支えており、彼の活動についても、彼の生産物についてもかならずしもその全体が交換に依存するようになっていたわけではない。(Marx (1857/58) S.100-101, 括弧内引用者, 強調原文)

2.1 で見たように、人が欲求 wants の一部を自分の労働生産物で満たし、残りを交換によって充足するというのがスミスの必要交換論の描く世界であった。上の引用のなかの、特殊な対象としての労働時間と一般的対象としての労働時間の矛盾の相互並置というのはこのことを指すが、マルクスはこの点を批判する。このような見方は、「スミスが生きた時代の生産の段階」、すなわち、資本主義の未発達な段階に制約されたものである。マルクスは、スミスが言うような生計の一部だけを交換に頼るような世界ではなく、すべてのものが市場向けに生産され、生計全体が交換に依存するような世界を想定すべきだと主張する。

一見すると、マルクスは、スミスの必要交換論の想定が不徹底であることを批判しているにすぎないように見える。スミスの想定では、必要の領域が完全には市場化されておらず、このために、言わば不純な必要交換論を説くことになってしまっている。上の批評がこのようなものだとすると、マルクスの立場は、広い意味での必要交換論からは一歩も食み出すものではないことになる。

しかしながら、『経済学批判。原初稿』(以下、『原初稿』)において、同様のスミス批判を行なった際にマルクスが述べていることは、このような解釈を拒否しているように思われる。そこで、マルクスは、「スミスは、交換価値を展開するさいに、交換価値がまだ生産者自身の生存のために生産される使用価値をこえる超過分としてしか現われないような、交換価値の未発展な形態を、交換価値の適合的な形態として把握するという誤りをいまだに犯している」(Marx (1858-61) S.52) と述べたうえで、「ブルジョア社会においては交換価値こそが支配的な形態としてとらえられなければならない、その結果、生産者たちの、使用価値としての彼らの生産物に対する直接的関係はすべて消え去っていなければならない、すべての生産物が商業のための生産物としてとらえられなければならない」(Marx (1858-61) S.52, 強調原文) と批判した。マルクスは、ここで、スミスの想定する「交換価値の未発展な形態」を「自分の家族が消費する分を越えるわずかばかりの超過分」(Marx (1858-61) S.51) のみを交換に投じるフランスの自作農(独立生産者)に、「交換価値の適合的な形態」を「自分の生産物の販売に全面的に依存しており、したがって商品としての彼の生産物に、したがって彼の生産物の社会的使用価値に依存している」(Marx (1858-61) S.51) イギリスの借地農業者(資本家)に、それぞれ対応させて説明している。このことから分かるように、マルクスは、スミスの必要交換論がいわゆる独立生産者から成る単純商品生産社会を想定していると理解し

ている^{21,22,23}。単純商品生産社会では、いかに徹底した分業がなされようとも、すべての生産物が「商業のための生産物」として現われることにはならない、より正確に言えば、単純商品生産社会においては、分業は徹底化されえない²⁴。このように批判したうえで、マルクスは、スミスの想定する単純商品生産社会に対し、資本家と賃労働者から成る資本主義社会を対置したのである²⁵。

言い換えれば、マルクスの批判は、自分の「欲しい want」ものと他人の「望む want」ものとを交換しようとする性向（交換性向）の「緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結」（Smith (1776) p.47, 訳 I-24 頁）として商業社会（資本主義社会）を説くスミスの連続的な歴史観に対して向けられている。マルクスによれば、資本主義社会が成立するためには、資本が二重の意味で自由な労働者と出会わなければならないとされるが、それには、資本のいわゆる本源的蓄積、すなわち、「生産者と生産手段の歴史的分離過程」（Marx (1867=90) S.742）が歴史的な前提となる。「この〔資本 - 賃労働〕関係は、自然史的な関係ではないし、また、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的な関係でもない」（Marx (1867=90) S.183）と述べるマルクスの目は、スミスの必要交換論が資本主義成立の歴史的偶有性を無視するものと映ったのであろう²⁶。

²¹ このことは、『経済学批判』において、スミスの価値論の混乱を指摘した際に、はっきりと述べられている。「彼〔スミス〕にとって単純商品 einfachen Waare [sic] の立場では真実だと思われることが、単純商品に代わって、資本、賃労働、地代等々のいっそう高度で複雑な諸形態が現われてくるやいなや、彼にははっきりしなくなるのである。このことを彼はこう表現する、すなわち、商品の価値がそれに含まれている労働時間によって測られたのは、人間がまだ資本家、賃労働者、土地所有者、借地農業者、高利貸等々としてではなく、ただ単純商品生産者 einfache Waarenproduzenten [sic] および商品交換者として相対していたにすぎなかった市民階級の失われた楽園においてである、と」（Marx (1858-61) S.136, 括弧内引用者）。

²² 『国富論』のスミスが「資本 stock が特定の人々の手に蓄積されるようになる」前の一段階として単純商品生産社会を想定していたかどうかは解釈の分かれるところであろう。しかし、スミス自身が意識していたか否かは兎も角としても、必要交換論を突き詰めていけば、単純商品生産社会の想定へと行き着かざるをえないのであり、その意味では、マルクスの批判は的外れなものではない。

²³ 独立生産者から成る社会を単純商品生産社会と呼ぶことは、今日のマルクス経済学では一般的であるが、単純商品生産という言い回しはマルクス自身にはほとんどない。この用語法は、エンゲルスが『資本論』第3巻補遺でマルクスの価値法則の妥当性が「単純商品生産 einfache Warenproduktion」（Marx (1894) S.909）に限られると述べたのをきっかけにして、その後、広まっていったものと推察される。

²⁴ これは、『資本論』冒頭商品論においては単純商品生産社会が想定されるべきだという立場に対し、宇野弘蔵が一貫して主張してきたことでもある。宇野は、初期の著作においてすでに、次のように述べている。「商品経済が一社会の根本的な社会関係を規定するものになるためには、理論的にはもちろんのこと、具体的にもある程度まで支配的に、あらゆる生産物が、歴史的、具体的にいえばその社会の成員の大部分の人々の生活資料そのものが、商品として買われてはじめて個々の人々の使用に供せられるものにならなければならない。いわゆる単純なる商品経済は、その点で生活資料そのものはなお多かれ少なかれ自家で生産せられ、消費せられながら、その余剰が商品として販売せられるというような関係に立っている」（宇野 (1947) 211 頁）。

²⁵ マルクスが、ここで、スミスの単純商品生産社会に資本主義社会を対置させていることは、すべての生産物が「商業のための生産物」（Marx (1858-61) S.52）として現われる場合の例として、「近代工場」の賃労働者をあげていることから見ても明らかである。「近代工場、たとえば、綿布工場で働くひとりの労働者を例にとってみよう。彼が交換価値をまったく生産しなかったとすれば、彼はおよそなにも生産しなかったことになる。なぜなら、彼が手を触れて『これは私の生産物だ』と言うことができるような、手につかめるような使用価値は、なにひとつないからである」（Marx (1858-61) S.52）。また、『直接的生産過程の諸結果』では、資本主義的生産の基礎のうえで、はじめて、すべての生産物が商品に転化するようになると、明確に述べられている。「ただ、労働者人口がそれ自身まだ客体的な労働条件に属しているとか、それ自身まだ商品生産者として市場に現われるとかいうことをやめて、彼らの労働の生産物のかわりにむしろ彼らの労働そのものを、または、より正確には、彼らの労働能力を売るようになるときにのみ、生産は、その全範囲から見て、その完全な深さと広がりから見て、商品生産になるのであり、すべての生産物は商品に転化し、各個の生産部面の対象的な諸条件もそれ自身商品として生産にはいるのである。ただ資本主義的生産の基礎の上においてのみ、商品は実際に富の一般的な基本的な形態になる」（Marx (1863-67) S.27-28, 強調原文）。

²⁶ マルクスは、交換と分業の相互関係から商業社会を導き出すスミスの方法も同様の観点から批判している。「彼〔スミス〕は、現実的労働から交換価値を生み出す労働、すなわちブルジョアの労働の基本形態への移行を分業によってなしとげようと試みている。ところで、私的交換が分業を前提するというのは正しいが、分業が私的交換を前提とするというのは誤りである。たとえばペルー人のあいだでは、私的交換、商品としての生産物の交換はなにもなかったが、分業は極度に行なわれていたのである」（Marx (1858-61) S.137, 括弧内引用者、強調原文）。

3 単純流通としての市場——マルクス

3.1 生産と消費の捨象

マルクスのスミス批判が以上のようなものだとすれば、マルクスをスミスの必要交換論の延長上に位置づけることはできないはずである。マルクスが考察の対象とする資本主義社会とは、必要交換論だけで一元的に構成される均質な世界（単純商品生産社会）とは異なって、労働力を売って得た賃金と交換に必要な手に入れねばならない労働者と余剰を交換に投じてさらなる余剰を得る資本家——および土地所有者——という異質の交換原理が織り成す階級社会であるからだ。ところが、マルクスは、『資本論』のいわゆる冒頭商品論をスミスの必要交換論と明確に異なるものとしては展開していない。それどころか、第2章「交換過程」では、スミスとよく似た説明を行っているのである。

彼〔商品所有者〕の商品は、彼にとっては直接的な使用価値をもっていない。もしそれをもっているなら、彼はその商品を市場にもってゆかないであろう。彼の商品は、他人にとって使用価値をもっている。彼にとっては、それは、直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである。それだからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値をもつ商品と引き換えに、手放そうとするのである。（Marx (1867=90) S.100, 括弧内引用者）

使用価値を必要に置き換え、またそれを欲求の対象として理解するならば、この文章で述べられていることは、スミスの必要交換論の内容とほとんど同じである。自分にとっての非使用価値、すなわち、必要を超える余剰を、自分にとっての使用価値、すなわち、必要なものと交換する。このように、必要交換論を批判しているはずのマルクス自身が、一見するとスミスと区別のつかないような議論を行なっているのである。マルクス経済学における古典的な論争、すなわち、『資本論』の冒頭商品論は、単純商品論か、資本主義的商品論かという論争の淵源もこの辺りにあるのかもしれない。

マルクスの態度を分かりにくくしているのは、『資本論』で採用された以下のような屈折した方法である。マルクスは、単純商品生産社会ではなく、資本主義社会を研究の対象とすべきだと主張したが、資本主義的生産（資本-賃労働関係）をそのまま叙述の端緒に据えようとはしなかった。資本主義的生産（資本-賃労働関係）を説くのに先立って、生産（と消費）を捨象した商品・貨幣論を展開したのである。『資本論』の商品・貨幣論では、商品がどのような生産関係のもとで生産されたかは捨象されている。

すでに、マルクスは、先に見た『原初稿』のスミス批判のあとで、「交換価値が単純な出発点として表層 Oberfläche に現われ、単純流通 einfachen Circulation [sic] のなかでくりひろげられる交換過程が、単純ではあるが生産と消費との全体を包括する社会的物質代謝として現われるためには、ブルジョア的生産の全体制が前提となっている」（Marx (1858-61) S.52, 強調原文）と総括したうえで、「ところが、このような諸関係は、単純流通の立場からは消えてしまっている」と述べていた。マルクスによれば、全面的な交換過程は、単純商品生産ではなくブルジョア的生産（資本主義的生産）を前提するが、その生産関係は、交換過程では捨象されるという。このような生産関係が捨象された「表層 Oberfläche」をマルクスは「単純流通 einfachen Circulation」と呼んでいる。こうした認識から、マルクスは、『資本論』では、商品・貨幣論を単純流通——『資本論』においては、「単純な商品流通 einfache[n] Warenzirkulation」（Marx (1867=90) S.128）、あるいは、たんに「商品流通 Warenzirkulation」（Marx (1867=90) S.125）と呼ばれる——として説くようになった。

たものと推察される²⁷。

商品・貨幣論から生産関係が捨象されるのと並行して、交換の対象は、必要か、奢侈か、あるいは、生産手段か、といった問いも排除されることになった。『資本論』の冒頭において、商品の使用価値を説明する際に、マルクスは、このことをはっきりと述べている。

商品は、まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間の何らかの種類の欲求を満足させる物である。この欲求の性質は、それがたとえば胃袋から生じようと空想から生じようと、少しも事柄を変えるものではない。ここではまた、物がどのようにして人間の欲望を満足させるか、直接に生活手段として、すなわち、受用の対象としてか、それとも、回り道をして、生産手段としてかということも、問題ではない。(Marx (1867=90) S.49)

もっとも、このように述べているからといって、必要と奢侈の区別がマルクスにとってどうでもよいものであったわけではない。剰余価値論において、「労働力の所持者の維持に必要な notwendigen 生活手段の価値」(Marx (1867=90) S.185) を超えるものとして剰余価値を規定していることから分かるように、マルクスには、必要はきわめて重要な概念であった。マルクスは、必要から奢侈までを連続体と捉えるような相対的な見方を探ってはいない。マルクスは、必要と奢侈の区別を否定したというよりも、この区別を欲求と欲望といった情念の相違から説明するのではなく、階級関係を通じて形成される歴史的な産物として捉え返したと見るべきであろう^{28,29}。このように、マルクスにおける必要と奢侈の区別が階級関係(資本-賃労働関係)を前提としている以上、商品・貨幣論ではこの区別は捨象されざるをえない。同様に、生産手段と生活手段(消費手段)の区別が除外されることは言うまでもない。

3.2 単純流通論の限界

単純流通の「単純な einfach」が意味しているのは、流通からの生産と消費の捨象だけではない。マルクスによれば、単純流通は、資本の流通形式 $G-W-G'$ に対して、より単純な流通形式

²⁷ マルクスの商品・貨幣論の対象が単純流通であるという解釈は、佐藤(1992)第III部第3章、高須賀(1979)第1章などによって提出されている。もっとも、『原初稿』に示されているこの方法をマルクスが一貫して採りつづけたかどうかははっきりしない。『資本論』では、スミスの単純商品生産社会を想定しているかのような記述が散見されるのも事実である。この点について、佐藤は、『資本論』よりも『原初稿』を評価する立場から、「マルクスは、『要綱』以後、論理説からしだいに論理=歴史説へ移行していったのではないか」(佐藤(1992)370頁)と推論している。

²⁸ マルクスは、再生産表式論において、必要と奢侈を次のように区別している。「消費手段。これは労働者階級の消費にはいるものであり、また、必要生活手段であるかぎりでは、たとえその品質や価値から見て労働者のそれとはちがっていることもあるにせよ、資本家階級の消費の一部をもなしている。…奢侈消費手段。これは資本家階級の消費だけにはいるものであり、したがって、労働者の手にはけっしてはならない剰余価値の支出分と取り替えることしかできないものである」(Marx (1885) S.402)。また、Elster (1985) p.69 では、アグネス・ヘラーに拠りつつ、マルクスにおける欲求概念が(1)肉体的欲求 Physical needs、(2)必要な欲求 Necessary needs、(3)奢侈的欲求 Luxury needs の三つに分類されている。エルスターによれば、マルクスは、(2)によって労働力価値を規定する一方で、(3)を労働者の生活水準には含まれないもの、労働者が購入できないほど高価なものに対する欲求と定義している。

²⁹ リースは、必要概念の維持が、マルクスにおいては、「個々の商品は、人間の欲求 human wants との関係で、ある客観的な性格をもっている」(Leiss (1976) p.77, 訳 149 頁)ことを意味していると理解したうえで、「その物的属性のみから生じてくる一見して明らかな客観的な性格だけをもっている商品などというものは存在しない」(Leiss (1976) p.77, 訳 150 頁)と批判している。しかし、労働力の価値規定について、マルクスが次に述べていることから見ても、リースの批判は適当ではない。「いわゆる必要な欲求 notwendiger Bedürfnisse の範囲もその充足の仕方もそれ自身一つの歴史的な産物であり、したがって、だいたいにおいて一国の文化段階によって定まるものであり、ことにまた、主として、自由な労働者の階級がどのような条件のもとで、したがってどのような習慣や生活要求をもって形成されたか、によって定まるものである」(Marx (1867=90) S.185)。マルクスは、必要とそれに対する欲求が生物学的な意味での客観性をもつとは決して考えていない。マルクスは、人間の必要が文化や習慣によって媒介されていることを十分認識しながらも、それが階級関係を通じて形成される歴史的な産物であるかぎりにおいて、ある種の客観性をもつこと、したがって、恣意的な主観によって、自由に変えるものではないことを強調したのである。

W—G—W であるという意味も含んでいる³⁰。したがって、商品・貨幣論を単純流通として説くことは、同時に、流通形式 W—G—W によって商品と貨幣を把握することでもある。ここで、重要なのは、全面的な交換過程を把握するためには、単純商品生産ではなく、ブルジョアの生産（資本主義的生産）が前提されなければならないが、生産関係が捨象された商品・貨幣論における単純流通 W—G—W は、単純商品生産における流通形式と同型であるということである。『資本論』の交換過程論の叙述とスミスの必要交換論との奇妙な符合はこのことに由来する。しかしながら、商品・貨幣論が単純流通 W—G—W として説かれねばならないというのは決して自明なことではない。

言うまでもなく、資本主義的生産から生産関係を捨象したからといって、単純流通 W—G—W が直接に得られるわけではない。『資本論』第 2 篇「貨幣の資本への転化」で明らかにされるように、資本の流通形式は、即自的には、単純流通 W—G—W ではなく、資本の一般的定式 G—W—G' である。したがって、第 1 篇「商品と貨幣」を単純流通として展開することに妥当性があるとすれば、単純流通 W—G—W が資本の一般的定式 G—W—G' の基礎である、あるいは、単純流通 W—G—W の発展したものが資本の一般的定式 G—W—G' であるという点にその根拠が求められねばなるまい³¹。じっさい、マルクスも「貨幣の資本への転化」の冒頭で「商品流通は資本の出発点である」(Marx (1867=90) S.161) と述べている。また、『経済学批判』では、「循環 G—W—G は、貨幣と商品という形態のもとに、いっそう発展した生産諸関係をひそめているのであって、単純流通の内部では、いっそう高度の運動の反映であるにすぎない」(Marx (1858-61) S.187) とも述べている。しかしながら、次のような「貨幣の資本への転化」の展開を見る限り、このような理由に基づいて単純流通から資本の一般的定式を説き起こすことには大きな問題があると言わざるをえない。

マルクスは、『資本論』第 2 篇「貨幣の資本への転化」において、まず、第 1 篇「商品と貨幣」で論じてきた単純流通 W—G—W に G—W—G を外面的に対置する。そして、導入した G—W—G が「無内容 inhaltslos」(Marx (1867=90) S.162) であると断じ、「その両極がどちらも貨幣なのだから両極の質的な相違によってではなく、ただ両極の量的な相違によってのみ内容 Inhalt をもつ」(Marx (1867=90) S.165) と述べて、G—W—G' に書き換える。この G—W—G' に対し、「商品交換に内在する諸法則」、すなわち、等価交換のもとでは、価値増殖は不可能であるとして、矛盾を設定する。そのうえで、「価値の源泉であるという独特な性質をその使用価値そのものがもっているような一商品」(Marx (1867=90) S.181) 労働力商品を導入することによって、この矛盾を解決する。

このような「貨幣の資本への転化」の展開から分かるのは、次のことである。資本の一般的定式 G—W—G' は単純流通 W—G—W からは決して導出されておらず、むしろ、単純流通 W—G—W と対立するものとして捉えられている。また、資本の一般的定式 G—W—G' は単純流通 W—G—W の法則のもとでは、不可能だとされている。単純流通 W—G—W から資本の一般的定式 G—W—G' へと連続的に発展するどころではなく、むしろ、両者の間には、決定的な断絶が横たわっているのである。

マルクスは、労働力商品を導入することで、単純流通 W—G—W と資本の一般的定式 G—W—G' の断絶が埋められ、前者から後者に転化することができると考えた。しかしながら、労働力商品の

³⁰ 「商品流通の直接的形式は、W—G—W、商品の貨幣への転化と貨幣の商品への再転化、買うために売る、である」(Marx (1867=90) S.162)

³¹ これとは別に、資本の循環に着目し、そのなかに単純流通と同じ形式を見出そうとする向きもあるかもしれない。確かに、マルクスも言うように、生産資本の循環は、「価値規定を度外視すれば、W—G—W (W—G·G—W)、すなわち単純な商品流通の形式である」(Marx (1885) S.70)。しかし、この解釈を採るにしても、商品・貨幣論が、なぜ他の資本循環ではなく、商品資本の循環から抽象されねばならないのかという点が問題とならざるをえない。

導入は、この転化という課題に応えるものではない。労働力商品が架橋するのは、可能だが無内容な $G-W-G$ と内容をもつが不可能な $G-W-G'$ とのギャップであり、それによって、単純流通 $W-G-W$ と $G-W-G$ との、したがって、資本の一般的定式 $G-W-G'$ との断絶を埋めることはできない。「貨幣の資本への転化」の課題と解答との間には明らかなずれがある。こうした難点を考慮するならば、資本の一般的定式 $G-W-G'$ の基礎であるという理由で商品・貨幣論を単純流通 $W-G-W$ として展開することに対して根本的な疑念が生じてくる。

問題はこれだけではない。マルクス自身が『原初稿』で指摘しているように、単純流通と単純商品生産社会とは、実は、相即不離の関係にある。

流通の立場からすれば、他人の諸商品、したがって他人の労働が領有されるのは、自分の商品、自分の労働の譲渡によってのみであるから、流通の立場からすれば、流通に先行する商品の領有過程が労働による領有として現象するのは必然的である。(Marx (1858-61) S.48, 強調原文)

『原初稿』のこの節が「単純流通における領有法則の現象」と題されていることから分かるように、この文章は単純流通の立場から見た領有法則について論じたものである。マルクスによれば、単純流通の立場から見れば、商品の領有は自己の「労働による領有」として現われるという。むろん、「現象 Erscheinung」(Marx (1858-61) S.47) と表現されていることから分かるように、商品所持者が実際にどのようにして領有したのかが、ここで問題になっているわけではない。マルクスは、「彼らがどのようにしてそれらの商品の所有者になったのが、その過程は単純流通の背後で進行しており、流通がはじまる前に消えてしまっている」(Marx (1858-61) S.48) と述べている。それにもかかわらず、あるいは、それがゆえに、単純流通のもとでは、商品の領有は「労働による領有」として現象する。難解な論理ではあるが、いずれにせよ、ここで述べられているのは、商品・貨幣論を単純流通として展開する限り、「労働による領有」という現象は「必然的」であり、したがって、単純商品生産という現象は不可避的だということである³²。しかしながら、マルクスの言う通りだとすると、単純流通論として商品・貨幣論を論じることは、前項で見たスミス批判と背馳することになりはしないか。

この点について、マルクスは、単純流通が単純商品生産社会を前提するということを主張しているのではなく、スミスを含めたブルジョア理論家たちが単純商品生産社会という「現象」に囚われていることを批判しているのだと解釈する向きもある³³。しかし、これは、スミスに対するイデオロギー批判としては有効だとしても、マルクス自身が、単純流通論として商品・貨幣論を展開すべきだという積極的な理由にはならないだろう。上で見たように、単純流通が資本の一般的定式の基礎でないとすれば、むしろ、そのような「現象」が生じる見地は採るべきではないということになる³⁴。

³²また、マルクスは、生産だけでなく消費についても、「[単純流通の]運動は、直接的な使用価値を求めてにしている生産の余剰をとらえるだけであり、それはこうした諸限界の内部で行われるほかはない」(Marx (1858-61) S.68, 括弧内訳者) と述べ、単純流通が必要交換論と結びつく傾向が強いことを指摘している。

³³例えば、佐藤 (1992) 第 III 部 第 3 章 参照。

³⁴宇野は、次のように述べて、単純流通 $W-G-W$ が、単純商品生産社会の想定に繋がることに強い懸念を表明している。「 $W-G-W$ 」の形式は、生産過程を捨象した抽象的規定である。したがってこれを理解する場合に、われわれが強い生産過程を想定することになると、勢いいわゆる単純なる商品生産者を仮定せざるを得ないことになる。それはこの規定を理解する手段としては止むを得ないし、また或る程度便宜でもあるが、しかし危険を免れない」(宇野 (1952) 496 頁)。しかしながら、その後、展開された宇野の商品論は、この懸念を払拭する方向には必ずしも進まなかったように思われる。「純粋な形態規定」として把握した商品は、「いわゆる単純商品、それは種々なる特殊の生産関係のもとに生産されながら、単に商品として売買されるという意味で単純商品といってよいのだが、そういうものとも形態規定を共通にすることになる」(宇野 (1963) 9-10 頁) と述べる宇野の商品規定は、商品・貨幣論を単純流通として捉えるマルクスの方法ときわめて近いところにある。

3.3 余剰の交換——ロックを通して見たマルクス

マルクスは、スミスの必要交換論の背後に単純商品生産社会が想定されていると非難したが、その一方で、商品・貨幣論においては、スミスと同型の流通形式、すなわち、単純流通 $W-G-W$ を採用した。前項までの検討を通じて明らかになったのは、単純流通は、単純商品生産社会批判とは合致せず、それどころか、批判の有効性を毀損することにもなりかねないということである。

ところで、マルクスは、スミスの必要交換論を批判したが、他方、ロックやヒュームの奢侈交換論についてはほとんど触れていない。生産とともに消費の問題を商品・貨幣論から捨象するマルクスの方法からすれば、このことは当然とも言える。必要交換論と奢侈交換論の争点は、交換の目的が必要か奢侈という点であり、この問いが排除されてしまえば、両者の対立はほとんど意味をなさなくなる。また、形式的には、奢侈交換論も必要交換論と同じ $W-G-W$ を描くことから、商品・貨幣論を単純流通として説くマルクスの目に、両者の相違が重要なものと映らなかったとしても不思議ではない。事実、マルクスはヒュームを貨幣数量説の代表者と見なしており、したがって、ヒュームには流通を $W-G-W$ として捉える傾向が顕著であったと解釈しているのである³⁵。

しかしながら、他方で、マルクスは、「もっとも発達したブルジョアの経済においてさえ、流通手段としての金銀の特有な機能とは違った、また他のすべての商品に対立した、貨幣としての金銀の特有な諸機能は、廃棄されないで、ただ制限されるだけであって、それゆえにまた重金主義と重商主義とはその権利を保持するのである」(Marx (1858-61) S.218-219) と述べ、重商(重金)主義の貨幣把握の独自性を認めている。マルクスによれば、「金銀すなわち貨幣を唯一の富である、と宣言した」(Marx (1858-61) S.217) 重商(重金)主義は、貨幣としての貨幣の諸機能——蓄蔵貨幣の形成、支払手段、世界貨幣——を重視する立場をとるとされるが、このこととロックとヒュームを貨幣数量説に分類することは表面的にはくいちがっているように見える。なぜなら、マルクス自身も述べているように、貨幣を富と見る重商(重金)主義とは対照的に、古典派経済学に代表される貨幣数量説においては、「商品流通がもつばら形式 $W-G-W$ で、そしてこの形式がこれはまたこれでもつばら販売と購買との過程的統一という規定性で把握されるので、貨幣は、貨幣としての貨幣という形態規定性に対立して、流通手段としての貨幣という形態規定性において主張される」(Marx (1858-61) S.219) からである。したがって、マルクスの解釈に従えば、重商主義のなかには、二つの対立する貨幣観、すなわち、貨幣を富と捉える重商(重金)主義固有の貨幣理解と流通を $W-G-W$ に解消する古典派的な貨幣数量説とが共存していることになる³⁶。

もっとも、ヒュームの場合、貨幣は交換を円滑にするための「油 oil」(Hume (1752) p.309, 訳 33 頁) にすぎないと明確に述べており、貨幣を富と見る重商(重金)主義の貨幣観からはもはや脱却していたと解すべきだろう。じっさい、論考「貿易差額について」では、正金の自動調節機構(貨幣数量説)が説かれ、重商主義の貿易差額論が明確に否定されている。ヒュームは、国力が貨幣量の多寡に依存するという重商主義的な見方を拒絶し、奢侈が欲望を刺激して余剰を生産する能

³⁵Marx (1858-61) S.219-224.

³⁶ケインズはこの共存を「一方の足を重商主義者の世界におき、他方の足を古典派の世界においていたため」(Keynes (1936) p.343, 訳 342 頁) であると説明し、このことからロックを「双生児的貨幣数量説の父」と呼んだ。また、ヒュームについては、「古典派の世界へ一方の足と他の足の半分を入れていた」と述べ、より古典派経済学に近い立場を採っていたと解釈している。

力を高める点を重視した³⁷。一方、ロックは、ヒュームのように貨幣と奢侈をはっきりとは区別しておらず、したがって、貨幣を奢侈を手に入れるためのたんなる手段だとは見ていない。このことは、ヒュームを奢侈交換論の完成者として評価する立場からすると、たんなる混乱と映るだろうが、見方を変えれば、そこには、ロック独自の貨幣観が現われているとも言えるのである。

そもそも、ロックが、奢侈のない世界では、交換が行き詰まる考えた理由には、腐敗による制約の問題があった。腐敗の制約の意味するところは、自然法が無駄や浪費を文字通り禁じているということよりも、むしろ、奢侈のない世界では、余剰を貯蔵することが原理的に不可能だということにある。この見方の背後には、必要/奢侈の区別を耐久性のないもの/あるものの区別と重ねるロックに特有の観点がある。ロックによれば、貯蔵可能な耐久性のあるものが奢侈であり、それゆえ、奢侈のある世界において、はじめて余剰が腐敗の制約から免れることができるのである³⁹。

このように見ると、なぜロックが貨幣と奢侈を区別しなかったのかが分かってくる。ロックは、ヒュームのように「生活上の装飾 ornament と快樂 pleasure とに役立つ財貨」(Hume (1752) p.302, 訳 23 頁) が奢侈だとは考えなかった。ロックの奢侈概念は必要を超える余剰という原義にきわめて忠実なものである。すなわち、必要を超える余剰の貯蔵可能な形態が奢侈なのである⁴⁰。ここでは、奢侈が何であるかは問題にはならない。「もし彼が一週間で腐ってしまうすももを、まる一年も腐らずに食べられるくると交換すれば、彼は何も侵害しなかったことになる」(Locke (1689) p.318, 訳 222 頁) と述べていることから分かるように、ヒュームであれば、必要であるはずのくるとも、ロックにとっては、貯蔵可能な余剰という意味で、奢侈なのである。

ヒュームとロックは、同じく奢侈交換論を展開しているとは言え、詳細に見てみると、その内容はかなり異なっている。ヒュームの交換論は、必要を超える余剰を奢侈と交換する——貨幣はその媒介(潤滑油)にすぎない——のだから、文字通りの意味での奢侈交換論である。他方、ロックの場合、腐敗しやすい貯蔵不可能な余剰を耐久性のある貯蔵可能な余剰と交換する。ロックの交換論は、正確には、奢侈交換論というよりも、余剰交換論と呼ばれるべきものである。ロックは、このような耐久性のある貯蔵可能な余剰の典型が金・銀、すなわち、貨幣であると考えた。したがって、ロックが貨幣数量説を唱えていたか否かは措くとしても⁴¹、ロックにとって、貨幣が商品交換

³⁷ 神聖ローマ帝国の国力の停滞の理由を貨幣の不足に求める見解に対し、ヒュームは次のように述べている。「以上の難点にたいして、わたくしは、ここで貨幣の稀少から生ずるものと想像されている結果が、実は国民の生活態度と慣習とから生ずるのであり、またきわめてよくあるように、われわれは副次的な結果を原因と間違えているのだと答えよう」(Hume (1752) p.318, 訳 41 頁)。富裕が貨幣量ではなく、生産力(勤労 industry)によって決まるという点ではスミスと一致していたにもかかわらず、このように、ヒュームが必要よりも奢侈を重視したのは、奢侈に対する欲望の無限性の重視に加えて、次のような理由もあった。すなわち、ヒュームは、平時における不生産的労働者の存在が有事のための兵力の準備となりうると考えていた。「ことがらを抽象的に考察すれば、製造業者が国家の力を増大させるのは、かれが十分な労働を、それも国家がだれの生活必需品 necessaries of life をも奪わずに要求できるような種類の労働を貯えるときに限られると云う。したがって、労働がたんなる必需品をつくる以上に用いられることの多いほど、国家はそれだけ強大になる。なぜなら、その労働に従事する人びとはたやすく公役に向け変えることができるからである」(Hume (1752) p.286, 訳 11-12 頁)。

³⁸ ヒュームには、貨幣の増加が勤労 industry を刺激するという記述(Hume (1752) p.313, 訳 37 頁)もあるが、これはあくまで正金の自動調節機構が貫徹するまでの短期的な効果を述べたものにすぎない(いわゆる連続的影響説)。さらに、坂本(1995)によれば、この連続的影響説さえ、奢侈による生活様式の洗練が前提とされているのである。すなわち、「ヒュームの連続的影響説とは、生産的な生活様式がすでに存在しているという暗黙の前提の上に、そうした国や地域であれば、貨幣の流入は物価上昇までの間隙に産業活動を刺激するであろうと主張する理論」(223 頁)なのである。

³⁹ 生越(1991)によれば、ロックは、貨幣のなかに、次のような三つの意味を込めている。「第1に、金銀・ダイヤモンドなどは、『それ自体有用でないもの』(§46)、『嗜好や約束によって価値の与えられたもの』(§46)、『人間の生活にはほとんど役に立たない』(§50の最初の部分)ということ、第2に、それらは腐敗しないものだ(§47)ということ、第3に、貨幣の取得は、自らの労働の生産物の剰余との交換であるから、労働生産物そのものの蓄積であるということ、以上である」(161 頁)。ロックにおいては、奢侈性、耐久性、余剰性という三つの性格が貨幣のうえに重ねられているのである。

⁴⁰ ロック自身は奢侈という語は用いておらず、「自分が必要とする needed 以上のもの」(Locke (1689) p.312, 訳 215 頁)や「実際に役にたつとか、生活の支えに必要な necessary Support of Life だとかいうよりは、むしろそれに対する人間の愛好とか合意によって価値を与えられているもの」(Locke (1689) p.318, 訳 221 頁)といった迂遠な表現をしている。

⁴¹ マルクスは、ロックについて、貨幣数量説をときに肯定し、ときに否定していると述べており、ロックを貨幣数量説に完全に分類しているわけではない。Marx (1858-61) S.219 参照。また、ロックの貨幣論を貨幣数量説と解釈することは、今日の経済学説史においては、ほとんど常識となっているが、これについては異論もある。例えば、羽鳥(1976) 85-89 頁は、「ロックの経済理論を貫く論理が重商主義に固有のものである」という理由から、ロックをリカードの機械的貨幣数量

のたんなる媒介以上のものであったことは間違いない。ロックは、貨幣のもつ貯蔵可能性を重要視しているのである。

もっとも、ロックの場合、余剰生産物の腐敗と貨幣の耐久性を強調しすぎたために、余剰の貯蔵可能性がもっぱら貨幣に帰属せしめられている。しかしながら、腐敗性/耐久性という素材上の属性に問題を解消してしまうべきではないだろう。ロックのそもそもの意図からすれば、消費の限界を超える余剰は無用の余りであり、交換に投ずることができなければ、腐敗しようとしまいと無駄になってしまうことには変わりはないはずである。ロックの余剰交換論の意義は、貨幣の貯蔵可能性以前に、本来は無駄という否定的な意味しかもちえない余りを肯定的な余剰に転換する機構として交換を捉えた点にこそある。

このようなロックに通じる視角は、マルクスのなかにもないわけではない。とりわけ、貨幣の貯蔵可能性にマルクスが強い関心を抱いていたことは、様々なところから見て取れる。例えば、マルクスは、『経済学批判』貨幣章に「貴金属」という一項目をわざわざ設け、「耐久性、相対的な不滅性、大気に触れても酸化しない性質、金の場合にはとくに王水以外の酸には溶解しない性質」(Marx (1858-61) S.214) が貴金属を蓄蔵手段に相応しいものにするを指摘している。また、『資本論』第3節 a「蓄蔵貨幣の形成」では、重商主義の貨幣観を一定程度評価しつつ、W—G—W のたんなる媒介としてではなく、「自己目的」(Marx (1867=90) S.144) として、蓄蔵貨幣が積極的に形成されることを指摘しているのである。マルクスは、ロックを意識してのことではないにせよ、ロックが考えようとした問題の所在に気がついている。

しかしながら、マルクスは、この視点を十分に掘り下げることができなかった。このことは、マルクスが商品・貨幣論を単純流通 W—G—W として展開したと密接に関連している。W—G—W が商品流通の常態だとすれば、貨幣 G の滞留は商品流通の一時的な中断としてしかありえない。流通における貨幣を「自己目的」として捉えることは、商品・貨幣論を単純流通 W—G—W として展開する方法とは真向から対立する。マルクスは、ロック的な視角と単純流通論との間を揺れ動いているが、最終的には、後者を商品・貨幣論の本流に位置づけ、前者を周辺的な問題として排除する。すなわち、「商品の命がけの飛躍」(Marx (1867=90) S.120) の失敗や販売のあとに直ちに購買が続かない場合の「休止点」(Marx (1867=90) S.127) は、『資本論』では、純粋な考察のためには「正常な進行」(Marx (1867=90) S.122) を前提にしなければならないという理由で、アノマリーであるとされ、蓄蔵貨幣も「未開の単純な商品所持者」(Marx (1867=90) S.147) にとっての富の形態であるとして歴史の彼方へと追いやられることになったのである。

結びに代えて

すでに見たように、マルクスの単純流通論——ヒューム、スミスいずれの交換論とも形式的には共通する——は、資本の把握に無視しえぬ困難をもたらす。単純流通 W—G—W を前提するかがり、必要にせよ、奢侈にせよ、自分のための使用価値を最終目的にしてしか交換は行なわれないという市場についてのきわめて限定された見方に行き着くからである⁴²。この狭い見方にとどまるな

説の先駆とする通説に対し異議を唱えている。

⁴²ヒュームの奢侈交換論は問題の立て方を間違えていたのかもしれない。資本主義の勃興期にあって、ヒュームは、市場経済の発展を牽引するのが、富裕者、とくに、地主の奢侈的消費であると考えた。しかしながら、その一方で、「国民の数と産業活動 industry とが増大するにつれて、かれらの間の相互交通の困難が増大する」(Hume (1752) p.325, 訳 54 頁) ため、仲介者としての「商人 *merchants*」の役割が重要になるとも述べている。ヒュームによれば、「精緻な嗜好 *delicacy* と産業活動 *industry*」(Hume (1752) p.296, 訳 14 頁) は、外国貿易による「奢侈の快楽と商業の利益」によって、刺激されるのだから、奢侈を重視するということは、外国貿易を担う「貿易商人」の役割を強調することと表裏であるはずである。加えて、ヒュームは次のようにも述べている。「かれ〔人間〕に与える仕事が儲けのあるものなら、ことに勤労の行使にはどんな種類のものにも利益が付与されるならば、かれはきわめてしばしば利得を眼中におくわけであり、こうして次第

らば、使用価値の獲得ではなく、価値の増殖を目的とするような資本の運動は、市場にとって、非本来的な、あるいは、顛倒したものとして現われざるをえないだろう。マルクスは、『原初稿』において、 $W-G-W$ を「自然的かつ理性的形式」(Marx (1858-61) S.74) と見なし、 $G-W-G$ を「反自然的で目的に反するもの」ときめつけているという廉でアリストテレスを責めているが、単純流通論を採る限り、マルクス自身にもこの批判は妥当してしまう。

使用価値目的の交換 $W-G-W$ は、その原型 $W-W$ を自分にとっての余剰と自分にとっての必要(あるいは奢侈)との交換として仮構する。これに対し、ロックは、腐敗というやや不正確な論理を用いながらも、否定的なものにすぎない余りが肯定的な余剰に転換されるところに交換の意味を見出した。この立場は、市場の出発点において、すでに資本の萌芽が埋め込まれていると見ることにつながる。市場は、スミスらが考えるように、たんなる使用価値の獲得を目指して発展してきたわけではない。必要に対する欲求ではなく、余剰を貯蔵可能な形態で保持し、できうるならば、余剰を増やそうとする「欲動 Trieb」(Marx (1867=90) S.147, 247)こそが市場の基底をなしているのである。

次稿では、このような視角からマルクスの商品論を再検討し、単純流通 $W-G-W$ を基礎にして形づくられてきたこれまでの議論とは異なった市場理論の可能性を探ってみたい。

参考文献

- Berry, Christopher J. (1994) *The Idea of Luxury: A Conceptual and Historical Investigation*: Cambridge University Press.
- Elster, Jon (1985) *Making Sense of Marx*: Cambridge University Press.
- Hirschman, Albert O. (1977) *The Passions and the Interest*: 20th anniversary ed., Princeton University Press, 1997. (佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』, 法政大学出版局, 1985年).
- Hont, Istvan and Michael Ignatieff, eds. (1983) *Wealth and Virtue: the Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*: Cambridge University Press. (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』, 未来社, 1990年).
- Hume, David (1752) *Political Discourses*, in *The Philosophical Works of David Hume*, vol.III, edited by T.H. Green and T.H. Grose, Reprint of the 1854 ed.: Thoemmes Press, 1996. (田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』, 御茶の水書房, 1983年).
- Keynes, John M. (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*: Macmillan, 1973. (塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』, 東洋経済新報社, 1983年).
- Leiss, William (1976) *Limits to Satisfaction: An Essay on the Problem of Needs and Commodities*: University of Toronto Press. (阿部照男訳『満足の限界—必要と商品についての考察』, 新評論, 1987年).

にそれ〔利得〕に対する情念 passion を獲得し、自分の財産が日毎に殖えてゆくを見る快樂にまさる快樂を知らぬようになる。そしてこれこそ、なぜ交易が節約を増大させるのか、またなぜ商人のなかでは浪費家よりも吝嗇家の方が多く、地主のあいだではちょうどその正反対であるのか、ということの理由なのである」(Hume (1752) p.325, 訳 55 頁, 括弧内引用者)。ここには、必要に対する欲求とも奢侈に対する欲望とも異なる「〔利得〕に対する情念 passion」が指摘されているのである。ヒュームが市場の牽引役と見なすべきだったのは、地主(奢侈交換論 $W-G-W$)ではなく、商人(余剰交換論 $G-W-G'$)であったのではあるまいか。

- Locke, John (1689) *Two Treatise of Government*, edited by P. Laslett: Cambridge at the University Press, 1960 . (宮川透訳『統治論』, 中央公論社 (『世界の名著 27 ロック・ヒューム』, 所収), 1968 年).
- Mandeville, Bernard (1714) *The Fable of the Bees, or, Private Vices, Publick Benefits*: vol.1, Oxford University Press, 1924 . (泉谷治訳『蜂の寓話—私悪すなわち公益』, 法政大学出版局, 1985 年).
- Marx, Karl (1857/58) *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-1.1, 1.2: Dietz Verlag, 1976, 1981 . (資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集 (1)(2)』, 大月書店, 1981, 1993 年).
- (1858-61) *Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-2: Dietz Verlag, 1980 . (資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集 (3)』, 大月書店, 1984 年).
- (1863-67) *Ökonomische Manuskripte 1863-1867*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-4.1: Dietz Verlag, 1987 . (岡崎次郎訳『直接的生産過程の諸結果』, 国民文庫 (大月書店), 1970 年).
- (1867=90) *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie, Band I*, in *Marx-Engels Werke*, 23: Dietz Verlag, 1962 . (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論第一巻』, 大月書店, 1968 年).
- (1885) *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie, Band II*, in *Marx-Engels Werke*, 24: Dietz Verlag, 1963 . (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論第二巻』, 大月書店, 1968 年).
- (1894) *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie, Band III*, in *Marx-Engels Werke*, 25: Dietz Verlag, 1964 . (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論第三巻』, 大月書店, 1968 年).
- Polanyi, Karl, Conrad M. Arensberg, and Harry W. Pearson, eds. (1957) *Trade and Market in the Early Empires*: The Free Press . (抄録: 玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』, 日本経済新聞社, 1975 年).
- Rousseau, Jean-Jacques (1754) *Discours sur l'Origine et les Fondements de l'Inégalité parmi les Hommes*: Editions Sociales, 1954 . (本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起原論』, 岩波文庫, 1957 年).
- Smith, Adam (1754) *The Theory of Moral Sentiments*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, vol.I, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie: Oxford University Press, 1976 . (水田洋訳『道徳感情論』, 岩波文庫, 2003 年).
- (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, vol.II-1,2, edited by R.H. Campbell and A.S. Skinner; textual editor, W.B. Todd: Clarendon Press, 1976 . (大河内一男監訳『国富論』, 中公文庫, 1978 年).

- Sombart, Werner (1912) *Liebe, Luxus und Kapitalismus*: K. Wagenbach, 1992 . (金森誠也訳, 『恋愛と贅沢と資本主義』, 講談社学術文庫, 2000年).
- Steuart, James (1752) *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, in *Collected Works of James Steuart*, vol.I-IV: Routledge/Thoemmes Press, 1995 . (小林昇監訳, 『経済の原理』, 名古屋大学出版会, 1952, 1982年).
- Xenos, Nicholas (1989) *Scarcity and Modernity*: Routledge . (北村和夫・北村三子訳, 『稀少性と欲望の近代——豊かさのパラドックス』, 新曜社, 1995年).
- 内田義彦 (1971) 『社会認識の歩み』, 岩波新書 (『内田義彦著作集』第4巻, 岩波書店, 1988年, 所収) .
- 宇野弘蔵 (1947) 『価値論』, 河出書房 (『宇野弘蔵著作集』第3巻, 岩波書店, 1973年, 所収) .
- (1952) 『価値論の研究』, 東京大学出版会 (『宇野弘蔵著作集』第3巻, 岩波書店, 1973年, 所収) .
- (1963) 『価値論の問題点——経済学ゼミナール(2)』, 法政大学出版局 .
- 生越利昭 (1991) 『ジョン・ロックの経済思想』, 晃洋書房 .
- 坂本達哉 (1995) 『ヒュームの文明社会——勤労・知識・自由』, 創文社 .
- 佐藤金三郎 (1992) 『『資本論』研究序説』, 岩波書店 .
- 高須賀義博 (1979) 『マルクス経済学研究』, 新評社 .
- 羽鳥卓也 (1976) 『市民革命思想の展開(増補版)』, 御茶の水書房 .
- 森田桐郎 (1997) 『世界経済論の構図』, 有斐閣 .
- 森村敏己 (1993) 『名誉と快樂—エルヴェシウスの功利主義』, 法政大学出版局 .